

山 田 晶：トマス・アキナスの《エッセ》研究

昭和53年 創文社 xi+p. 602

稲 垣 良 典

本書は著者の3部作「中世哲学研究」の中央に位置づけられている。第1巻「アウグスティヌスの根本問題」においては、アウグスティヌスにおけるテオロギア、真なるものと真理、悪と罪、愛などの諸問題を考察することを通じて、著者がアウグスティヌス哲学の根本問題であるとする「存在」あるいは「存在体験」に光が当てられた。これにたいして第三巻「在りて在る者」ではアウグスティヌスおよびトマスにおける自然神学の諸問題が考察されているが、そこでも著者の関心は圧倒的に「存在」の問題にむけられている。そして、これら2書の間中に位置する本書は、トマスの体系がそこに始まってそこに終わる「エッセ」の探求にさざげられたものである。

本書には5篇の論文（そのうち第2論文「存在とエッセ」が全体のほとんど3分の2をしめる）がふくまれている。第1論文「エッセの探求」は、副題「トマスのエッセ忘却と発見の歴史」が語っているように、トマス哲学の核心であるエッセが、トマスを熟知し、トマスに忠実であるはずの注釈家や教科書著作家の伝統のなかで見失われ、今世紀に入ってから近代や現代の哲学について優れた理解と感覚をもつ研究者たちによって発見されるにいたった歴史の概観である。このふりかえりを通じて、トマスのエッセをめぐる今後のにこされた問題があきらかにされ、著者の研究がトマス研究史のなかで位置づけられる。

第2論文「存在とエッセ——トマスにおけるエッセとエクシステレについて」においては、エッセの意味をあきらかにするために、それと不用意に同一視されたり、区別されたりしてきたエクシステレ、エクシステンチアの多様な用例を徹底的に吟味し、それらを統一的に把握しようとする基礎作業が遂行される。著者がめざすのはあくまでエッセの理解であるが、それをたんにエッセの用例にもとづいて追求するのではなく、エッセとエクシステレとの結びつきと区別の両面をあきらかにす

ることを通じて、いわばeksisテレの多様な用例を鏡として、そこにうつしだされたエッセの姿をてがかりに、エッセそのものに迫る、という方法がとられている。

第3—第5論文は、第2論文で獲得されたトマスのエッセについての洞察を、トマス解釈に適用したものであって、第2論文における徹底的な基礎作業が、たんなる「用語のせんさく」ではなく、じっさいにトマスの体系の基礎への有効な接近であったことを立証している。すなわち第3論文「神の存在とエッセ」では、トマスのいうエッセとeksisテレを同一視してはならない積極的な論拠として、トマスが一方では神の存在（eksisテンチア）が論証可能であることを主張しつつ、他方では神のエッセ（それは神においてはその本質と同一である）は不可知であるとしていることが指摘される。

第4論文「神の内存在と超越」は、神が全被造物を超越すると同時に、そのもっとも奥深くに内在する、という一見互いに矛盾する主張をとりあげ、それが、神は万物のエッセの第一作出因であるという同一の根拠からして整合的に説明されることを論じている。第5論文「存在と本質——トマスにおける実在的区別の意味について」は、（神を除いて）すべての存在者における存在（エッセ）と本質との区別は実在的であるか、単に概念的ないしは形相的であるか、という問題をめぐって長い間つづいた論争をとりあげ、この論争に結着をつけるためにはただトマスのテキストに注目するだけではたりないのであって、問題はむしろ、存在者をいかなる局面ないし場においてとらえるかにかかっている、との重要な指摘を行なっている。すなわち、存在者を存在者として単独に見るならば概念的区別の主張が妥当し、存在者を存在せしめている神との関係においてとらえるときにはじめて実在的区別が意味をもつ——そしてこのことを見落していたかぎりにおいて、実在的区別を主張したトミストの説も、厳密にはトマスに即した理解ではなかった、というのが著者の結論である。

明快さと説得性、これが本書からうけた筆者の第一の印象であり、おそらく本書を読んだ者がだれしも抱く印象ではないかと思う。こうした印象をもたらす直接の原因は、私のみるところでは、問題の所在をつきとめる鋭い感覚と、つきとめられた問題を定式化するにあたって示される手腕に存する。しかし、問題の所在を適確

につきとめ、それを整然と定式化することを可能にしているのは、著者の場合、トマスやアウグスティヌスの著作についての徹底した研究に加えて、プラトン、アリストテレスからデカルト、カントを経て、フッセル、ハイデガーにおよぶ西欧の主要な哲学者に関する幅広く、かつ正確な理解である。このため、著者の研究には思いつきといった要素はまったくなく、すべての成果がいわば正攻法によってかちとられている、との印象を与える。

上にのべたことと関連して、本書の学問的意義は、まずそれがトマスについてのきわめて優れた注釈である、という点で評価されるべきであろう。第2論文がトマス哲学の基本概念についての詳細かつ体系的な注釈であることはいうまでもないが、第4論文も『神学大全』第1部第8問題第1項（より厳密には第1異論解答）についての注釈として書かれている。

トマスについての論文が、その論文を書いた本人特有のトマス理解についての報告、記述であるにとどまらず、他の人々が正確にトマスを理解するのを助けてくれるのは、むしろ稀ではなからうか。つまり、トマスについての論文が、トマスをめぐっての議論、論争であるにとどまらず、真にトマスへの道でありうるのは、そしてその意味でトマス注釈でありうるのは稀にしかおこらないことではないのか。本書は、私の理解しえたかぎり、その稀な場合に属するものである。私はフランスがガリグー・ラグランジュを、スペインがラミレスをもったように、われわれが本書の著者をもつことを誇りにしたい。

トマスの Commentator としての著者にふれたのにつづいて、Auctor としての著者についてのべなければならぬが、このためには本書だけではなく、すくなくとも「中世哲学研究」全3巻を参照する必要がある。とくに第3巻の「まえがき」では著者の哲学的探求の道程が、あるところではデカルトの『方法序説』を、あるところではアウグスティヌスの『告白』を想起させるような筆調で印象ぶかく語られており、著者の哲学的立場、あるいはその中核をなす哲学的洞察をうかがい知るのに必須の資料である。本書にふくまれている諸論文は、著者自身の哲学的洞察の光にてらして行なわれたトマス解釈であるかぎりにおいて、単に哲学史的研究であるにとどまらず、すぐれて哲学的な研究である。この観点から見た場合、著者は Commentator としてではなく、Auctor として語っている。

では著者の哲学的立場の核心をなす洞察はどのようにいいあらわされるか。私の理解では、それは根原的恩恵としての「存在」(エッセ)の経験あるいは把握、という言葉でいいあらわされるように思われる。それは著者自身の立場ではなく、アウグスティヌスやトマス哲学の根原の思想を著者がいいあてたものではないか、との反論が予想されるが、私はあえて著者自身の根源思想でもある、と解釈する。著者がこの根原思想をアウグスティヌスやトマスのうちに読みとった、ということ、アウグスティヌスやトマスの研究を機に著者のうちにこの根原思想が形成された、ということの間には、いささかのずれもないからである。

本書において行なわれているトマス解釈の根底にあるのは上の「根原的恩恵としてのエッセ」という根原思想である。著者は第2論文の成果を、「エッセンチア(ないしラチオ)はエッセによって、またエッセにおいてエクシステレする」というトマス哲学の基本命題に結晶化させているが、こうしたエクシステレの場所としてのエッセという著者独自のトマス解釈を可能にしたのはさきののべた著者の根原思想であるように思われる。なぜなら、すべての存在者のあらゆる活動を可能にすると同時に、それらを形相的に規定する「場所」としてのエッセとは、根原的な恩恵としてのエッセの経験ないし洞察を論理化したものと考えられるからである。

ここで私は「場所としてのエッセ」という著者の独創的なトマス解釈について見解をのべる用意はないので——このトマス解釈は今後トマス研究者の間で詳しく検討、討論されるべき課題である——「根原的恩恵としてのエッセ」としていいあらわされている「存在の経験」について、とくにそこでの神学と哲学とのかかわりについて、私の考えをのべることで書評者としての責任を果すことにしたい。

問題は「根原的恩恵としてのエッセの経験」は哲学的経験であろうか、というものである。この点に関連して、著者は、トマスは哲学と神学を原理的に区別しているが、トマスの体系そのものにおいては、これまでは哲学、ここから先は神学といった区分は不可能であるとのべており、これには全面的に賛成する。つぎに、トマスがエッセについて集中的に考察するのは、神のもっとも固有的な名とされている「在る者」との関連においてであること、つまり神学のコンテクストにおいてであることはたしかである。さらにトマスがエッセとエクシステレについてのすべての思索を三一なる神の観想から汲みとってきている、という著者の見通しにも共感を覚え

る。一言でいえば、私もエッセの経験が神学的思弁あるいは観想から切り離されるものではなく、後者によって浸透されていることを認める。

しかし、エッセの経験はそれ自体において見られた存在者において、その意味で哲学的経験として成立するのではなからうか。すなわち、トマスが第一の自明的な諸原理の直知について語るさいに、また一、真、善など、エンスと置きかえることのできる超越的なものについて語るさいに含意されているエッセの経験は、「在る者」「それ自らにおいてスブシステレするエッセそのもの」との関係において明確化されるとしても、経験としてはそれ自体において見られた存在者において成立するといえるのではなからうか。

これにたいしては、たしかにそのような「存在の経験」について語ることはできるとしても、トマス自身においては「エッセの経験」はあくまで神学的コンテクストにおいて成立していた、と反論されるかもしれない。しかし私はあえて、トマスが神学と哲学とを形相的に区別していることを根拠に、哲学的な「存在の経験」をトマスについても語ることはできるのではないかと、この解釈を提示したい。このように著者が最近の論文でふれている「存在の経験」（「エッセの経験」「存在者の経験」）は、トマス解釈としてだけではなく、現代の哲学的状況のなかできわめて示唆に富む思想であると思われるので、その詳細な展開を期待してこの書評を終ることにする。